

目次	
会長挨拶	P1 『日中社会学研究』第19号
第22回日中社会学会大会を終えて	P1 原稿募集のお知らせ P15
大会報告	P2 会員エッセイ P16
第31回総会報告	P11 事務局からのお知らせ P17
2010年度	冬季研究集会のお知らせ P18
第2回日中社会学会理事会報告	P14

■会長挨拶

陳 立行

(日中社会学会新会長・関西学院大学)

私は、改革開放以降の最初の社会学専攻の中国人留学生として、1983年に来日し、日中社会学会の設立から今日まで、この学会とともに成長してきた。初代会長の故福武直先生は、設立大会での挨拶で、「中国の社会変化を見極める現地調査」、「若手研究者の育成」、「日中両国の学術交流」という三つの課題を提起され、その後、これは学会の精神になった。

本学会は、これまで20数年にわたり、三つの精神をもって地道に現地調査を重ねながら、日中両国に多くの若手研究者を育て、両国の社会学者の間には深い信頼関係と研究ネットワークが構築されてきた。学会として、たとえるなら、少年時代を過ぎて、活発な青年時代に入っているといえよう。そしてまさに今この時期、20世紀に近代化した日本の経験と21世紀に興起しつつある中国社会の諸事象を前にして、この歴史的展開は、本学会の発展に対して大きな可能性を与えてくれるものである。今後、アジアの全体的な発展に伴い、これまでの欧米社会とは異なる社会事象の展開を如何に読み解くかは、21世紀の社会科学の新たな発展に大きく繋がることになるであろう。

こうした状況の中で、本学会はこれまで以上に行動力と想像力が求められる。本学会の三つの精神を継承しながら、会員の力を結集し、学際的に、中国、日本、さらには他のアジア社会の変化の脈動を的確に掴んだうえで、その普遍性と独自性に関わる理論的研究をさらに深め、21世紀の社会科学の新たな発展に寄与しなければならない。これは、会長としての責務だと考えている。

初めての中国人の会長として、バトンを引き継ぐことに対して、歴史的責任とともに力不足も切実に感じている。今後、会員の皆様のご協力をいただきながら、力を尽くしていきたい。

■第22回日中社会学会大会を終えて

南 裕子(第22回大会実行委員長・一橋大学)

日中社会学会第22回大会を、6月5日、6日、一橋大学において、無事開催することができました。会員、非会員を含め50名を越える方々にお集まり頂き、開催校として大変嬉しく思っております。

今大会1日目は、一橋大学大学院経済学研究科教授・江夏由樹先生による特別講演「奉天地方有力者と清朝皇室一溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満州国」高官たち」に始まり、シンポジウム(1)「グローバリゼーションとチャイニーズネス」が行われました。続いて2日

目の午前は一般自由報告、そして午後には、シンポジウム(2)「現代中国の教育と移動」が行われました。今大会は自由報告の申し込みが多く、内容も大変多彩でした。家族や教育、地域などそれぞれの分野の専門学会で報告することも可能であるわけですが、日中社会学会ならではの議論が展開され、特に報告者の方々には得るものも多かったのではないかと拝察します。

私自身は、大会の運営に加えて事務局の引き継ぎという思いもよらなかった業務が発生してしまっただけで、それぞれのご報告をじっくりと拝聴する時間をもつことができず、大変残念かつ申し訳なく思っております。そのため、今回の大会での研究面での所感をここで述べることは控えさせていただきます。

大会運営におきましては、いろいろと行き届かぬ点があったことを今更ながらに思っております。お詫び申し上げますと同時に、皆様のご寛恕とご協力に心から感謝いたします。

■大会報告

第1日：6月5日(土)

○特別講演

「奉天地方有力者と清朝皇室

一溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち一

講演：江夏 由樹

(一橋大学大学院経済学研究科教授)

司会：南 裕子

(一橋大学)

江夏教授のご講演は、溥儀、溥傑らと一緒に撫順の戦犯管理所にいた満洲国の中国人高官が辿った歴史を追いながら、こうした人物に着目することが近代中国史研究にどのような問

題提起を行うことができるかを示唆されたものであった。

講演で具体的に取り上げられた中国人高官は、張煥相と袁慶清であった。中国東北近代史において、その名前はよく登場するものの、これまで大きな関心が払われることはあまりなかった人物であるとのことである。

以下、まずは、ご講演の内容の史実の部分を要約する。

張煥相は、満洲国の司法大臣、参議などを務め、溥儀の『わが半生』にも登場する。張家は、漢軍旗人の出身で、中国東北部(満州)を代表する名望家、富豪であった。彼自身は、辛亥革命以降満洲国まで、時々の政権が代わっても政権の要職に座り続けていた。

袁慶清は、溥儀や溥傑の回想録には登場しないが、満洲国時代にはハルビン市長などを務めた人物である。彼も、漢軍旗人の家の出身で、その父は、警察力の掌握を始めとして、在地勢力を組織化しその代表としての地位を得ていた。このため、時々の政権は在地勢力を背景にもつ袁家の存在を無視できず、袁家は政権の中枢に居続けていた。

実は、中国東北部の有力者は、張家と袁家のみならず、漢族の旗人、その子孫が少なくなかった。清朝の入管前に投降した明朝將兵は八旗制のもとに編成され、漢軍八旗や他の八旗に所属する漢族の將兵は、清朝の中国征服に大きく貢献した。その後これら漢族の將兵は武装解除され、多くは中国東北部の清朝皇室、皇族の官荘・莊園の管理、耕作等に従事した。それだけにとどまらず、その後、彼らはそれら土地の一部を自らのものとする事で満洲の大地主の地位を獲得した。このように、中国東北部には、清朝皇室が私的にコントロールする土地が広く存在し、漢族の旗人たちはそれを支え、そこに漢族の旗人の社会、ネットワークが形成されて

いた。例えば前出の袁家と張家は姻戚関係にもあり、密接な関係を形成していた。

江夏教授は、張煥相や袁慶清にとっては、歴史の教科書にあるように、辛亥革命の起きた1911年をもって清朝がなくなったわけではなかったことを指摘する。なぜならば、それまで清朝を支えてきた八旗等の組織、その土地財産などがすぐに消え去ることはなく、とりわけ、清朝の故地である満洲には清朝の家産である土地が広く残り、かつての漢軍旗人の世界がそこに生き続けていたからである。

このため、日本側は、満州国は清朝の再興ではないとしていたが、彼らにとっては「清朝復辟」の夢も他人事ではなかったという。彼らのたどったこのような歴史に着目することで、溥儀や溥傑の回想録などには必ずしも記されていないこうした歴史上の問題に迫ることが可能になるかもしれないことが指摘された。そして、さらに、かつての皇帝やその弟の姿を管理所のなかで見るとき、張煥相や袁慶清たちの頭の中にはどのような思いがよぎったのであろうか、という問いかけがなされた。

最後に江夏教授は、中国東北部（満州）の歴史は「辺境史」とみなされがちであるが、こうした見方は一面的であると述べられた。「マイノリティ」とみなされている対象にこそ、「コア」地域を見るだけではとらえきれない問題、例えば本報告の場合は、「清朝とは?」、「異民族支配とは?」、「民族のアイデンティティとは?」といった問題の一端に迫ることができることを示し、講演を締めくくられた。

質疑応答では、①資(史)料に関する質問(袁慶清について、張学良等近年まで生存していた人物の聞き取り資料の利用について)、②日本国内(外務省と軍部の関係)、中国東北部内部(漢族旗人と満州族旗人の関係)、それぞれの当時の状況について、③清朝と満州国の連

続性等についてフロアから質問が出された。

当日の司会者としての感想を最後に記したい。第一に、「マイノリティ」に着目し、その人物のネットワークを辿り社会を把握することで、「マジョリティ」の理解のために根源的な問いを発することができるという江夏教授の指摘は、現代中国を研究する我々も共有できるものであり、歴史研究から大いに学ぶべき点であろう。第二に、今回のご講演では、歴史年表に区切られた革命史の一方で、社会には連続性が存在していたことが鋭く指摘されていた。こうしたことは、一般に感覚として理解しているつもりではあるが、どのようにその連続性を明らかにしていくのかというときに、今回の手法は大変興味深いものであった。そして第三に、土地(清朝の家産)を管理することが、結局は限りなくその土地の管理者の私的な力になっていったという史実は、現代中国農村を研究する筆者にとっては、所有制の違いを超えてなお非常に示唆的であった

(文責：南 裕子)

シンポジウム(1)

「グローバル化とチャイニーズネス」

司会：西原 和久(名古屋大学)

報告者：中村 圭(同志社大学)

池本 淳一(早稲田大学)

本シンポジウムは、そのタイトルから、即座に次の3つの焦点があると予想されるだろう。まず第1にグローバル化をどう考えるか、第2にグローバル化時代の国民国家およびナショナリズムをどのように捉えるのか、そして第3に、このような問いについて、論題の中心である中国の現状に対してどのようにアプローチできるのか、という焦点である。

以下の2つの報告は、このような焦点に的確に応答する興味深いものであった。

第1報告の同志社大学・中村圭報告（「グローバル化における中国の『人才』移動」）は、まず「世界の市場」と呼ばれるようになった現代中国で、優秀な人材（「人才」）の流動（「跳槽」）が注目されるようになった現状が報告された。この点は、中国の経済発展を背景に、大学卒業者の急増とその就職難に加えて、政府による海外留学人員の帰国促進政策も深く関係する。とくに本報告では、こうした「跳槽」を可能にしている意識（集合意識）が複数の聞き取り調査を通して検討された。その結果、「跳槽」は社会関係資本の蓄積に基づき、自己発展の最大化を追求し、安定を求めるものであるという知見が示され、「流水不腐」という言葉に代表されるような「移動を肯定的に捉える」人才の集合意識が示された。

第2報告の早稲田大学・池本淳一報告（「グローバル化の中の伝統スポーツとチャイニーズネス」）は、まず民間の「武術」が民国成立後に「文弱から尚武へ」と語られつつ「国術」とされ、さらに梁啓超などによって「武の復興」が主張されて「チャイニーズネス」（帝国主義時代を生き抜く「中国らしさ」）を象徴するスポーツとなったことが指摘された。そして新中国成立後、武術文化は「競技武術」と「伝統武術」に分化し、前者は「WUSHU」（武術）として2008北京オリンピックでの正式種目がめざされた点、およびそれが最終的には非認定となった理由が論じられた。とくにその非認定の理由は、武術の担い手が中国以外でも華僑・華人に限られるという問題とともに、武術の理解にはチャイニーズネスの所有が不可欠というロジックが存在した点が指摘された。報告者はこうした点を、「国際社会の中での卓越化のための文化戦略」と捉えつつ、グローバル化下でのチャイニーズネスとアイデンティティの関係の探究が重要だとまとめら

れた。

以上に関しては、コメンテーターの金戸幸子氏および賽漢卓娜氏からコメントと質問が出された。両コメンテーターとも報告にはおおむね好意的であったと判断できるが、フロアからの質問も含めてまとめるならば、中村報告に関しては「跳槽」（意識）の現代性および「人才」の周辺労働力化の問題などが問われ、池本報告に関してはグローバリゼーションの多義的文脈などが問われたと言えよう。アイデンティティや集合意識をいかに捉えるのかという方法論の問題とともに、さらに今後の展開が大いに期待される報告であった。

このように、両報告はともに研究対象がきわめて興味深いものであり、具体的な事例からグローバリゼーションとそれに絡む社会現象の諸相を捉える興味深い視点となっていた。「世界規模でもほぼ1億人ともいわれる……中国人『人才』たちの地域や国境の枠をも超えた流動の行方」（中村報告）と、「中国各地における伝統武術の国際大会、……外国人愛好者、さらに『海外進出』……」の事例（池本報告）は、21世紀の世界社会を考えていく上で、そして会員の今後の研究へのさまざまな示唆を含んだ、きわめて重要な論点を提示する有意義なシンポジウムであったと総括できるだろう。

（文責：西原 和久）

第2日：6月6日（日）

一般自由報告A

司 会：陳 立行（関西学院大学）
報告者：聶 海松（東京農工大学）
吳 迪（筑波大学大学院）
李 妍焱（駒沢大学）

二日目は、9時15分から二つの一般自由報告が行われた。この会場では3人の報告者による報告がなされた。

まず、聶海松会員は内モンゴルで60歳以上の高齢者を対象としたアンケート調査の結果を報告した。この調査では高齢者の社会保障、居住、健康、介護扶養、精神状態などの各状況とその現状について調べ、中国の農村地域に社会保障制度が導入された後でも、高齢者たちは余裕がある生活にはまだ至っていないことが分かった。特に高齢者にとって、健康の維持、病気の治療には大きな経済的負担と精神的負担になっていることが報告された。

次に、吳迪会員は「中国における基層社区教育の現状と課題—武漢市硤口区のアンケート調査をもとに」という題目で調査結果を報告した。この報告では中国の地域住民を対象に、社区教育の取り組み、担い手、問題点と課題について論じられた。社区教育を担う組織は、市政府など行政組織、街道社区教育委員会などの社区組織及び居民委員会という居民組織という三級のレベルで設置されているが、その中の大部分は住民と一番密接な関係をもつ基層社区に設置されていることが分かった。社区教育内容については、それぞれの地域の事情と合わせた取り込みが可能であるが、武漢市の調査対象地域では、子供の放課後の教育（91.4%）、住民の教養とマナー（89.8%）、都市流動人口の地域生活の適応（47.7%）が上位になっている

と報告された。これらの事業の担い手としての基礎社区には、無論、行政は重要な組織力を持っているが、近年、住民により選ばれた居民委員が増え、住民の生活と緊密に繋がる地域活動を行う住民自治への動きが見られることが指摘された。

最後に、李妍焱会員により「中国の草の根NGOの対政府戦略—変革と創造を目指す攻防」という題目の報告がなされた。報告者はケーススタディと一年間の参与観察を通じて、NGOと政府との関係性について報告した。NGOには、法的に登録された「社会团体」「民弁非企業単位」「基金会」以外にも、未登録ではあるものの、他の組織に付属している「下からの各種の草の根NGO」が中国NGOの中核を構成している。彼らは政府の認可がなくては存続しにくい現状が続いている中で、自らの立ち位置を模索し生存していく道を探っている。そのような中で、政府と信頼関係と補完的フォーマル戦略をとりながら、行動効果を見せるためのインフォーマル活動が続けられていると指摘された。

この三つの研究発表に対して、フロアから多くの質問が出された。内容をまとめると以下の通りである。

質問：「社区」において、行政指導と住民自治という二重構造にはどのような変化が生じているか。

回答：以前は行政指導が重要な位置を占めていたが、最近、地域生活に影響するさまざまな社会問題に対応するために、住民自治の意欲と組織作りの動きが多くなった。自治組織の増加に伴い、行政指導よりも、行政と協働する傾向が生み出されている。

質問：居民委員会は、本当の意味での住民選挙により選出されることができのだろうか。

回答：確かに候補者を選ぶ段階では、行政に

よって推薦される人が多い。最近では差額選挙が以前より増えている。

質問：NGO活動は住民自治とつながることができるか。

回答：現時点では、政府と信頼関係を重視して活動しているから、それほどつながっていないが、今後、NGO活動の地域への浸透に伴い影響力が増大するならば、住民自治とつながることが期待できる。

(文責：陳 立行)

一般自由報告 B

司 会：石井 健一（筑波大学）

報告者：松谷 美のり（京都大学）

ジャザディグリ・シャウディ
（株式会社インテージ）

一般報告 B では、二本の研究報告があった。

松谷美のり（京都大学）の「中国へ向かう若年日本人の生活戦略とポジショナリティー香港、上海における現地採用就労者へのインタビュー調査を通じて」は、90年代以降増加してきた中国への日本人現地採用移住者の分析を通して、新しいタイプの在外日本人のアイデンティティ形成をとらえようとした研究である。この研究では、上海と香港への移住者のインタビュー調査と現地の人材紹介会社への聞き取りを通して、移住の背景、移住の動機、中国人のイメージに加えて移住者の生活戦略におけるポジショナリティーが分析された。その結果、移住者が在外日本人としてのポジショナリティーを保持しつつ、中国人との交流による現地化も図る柔軟なアイデンティティ形成をしていることがわかった。また、こうした若年移住者を新しい日中の人的交流のアクターとみなすことができるのではないかという指摘もなされた。

次にジャザディグリ・シャウディ（株式会社インテージ）の「サード・エイジャーのライフスタイルとインターネット利用—中国新疆ウイグル自治区における住民調査に基づいて」では、ライフスタイルによってインターネット利用選好に差異があるのかどうかという視点からの分析を中心として報告があった。報告で使われたデータは、2008年に中国の新疆ウイグル自治区で実施された大規模なアンケート調査結果であり、高校生を通してその祖父母に対して聞き取りを行ったとのことである。生活行動や社会観、交友行動などのライフスタイル変数を用いて、対象者をクラスター分析で類型化すると現代都市型のライフスタイルにおいてインターネット利用時間が長いという特徴があり、ライフスタイル変数の説明力が高いという結果が示された。

(文責：石井 健一)

一般自由報告 C

司 会：池本 淳一（早稲田大学）

報告者：王 鳳（島根県立大学・

北東アジア地域研究センター）

宮内 紀靖

(Miyouchi Institute of Social-ty・

中国瀋陽師範学院)

卯田 宗平

(東京大学・日本学術振興会特別研究員)

一般報告 C では、以下の三つの報告が行われた。

王鳳会員による「90年代以降の社会意識の変化に関する言説の一考察——「正しさ」の論理と「出来る」論理の狭間に」では、中国における文学研究の成果を取り入れつつ、改革開放以後の社会意識をとらえる枠組みの変容とその内的な葛藤を指摘したものであった。王会員

によれば、これまで多くの社会学者・文学者は改革開放以後の社会意識の中に見られる拝金主義や利己的個人主義に過度に着目してきたために、開放以後の社会意識を否定的に『欲望の解放』による自我（EGO）の拡張とのみとらえてきたという。しかしそのような視点には、「個人が欲望を追及する姿は『狭く』虚妄であり『正しくない』姿だ」と断定する、中国知識人の理想的で高尚な「エリート文化」が存在しており、現実の人々の社会意識から目を背けさせる結果を導いている。加えてこのようなエリート主義的な社会意識論は、何が社会的に「正しい」かが自明の時代、いわゆる「大きな物語」が存在した時代の名残りであり、このような論理を王会員は「正しさ」の論理として指摘した。

他方、文学研究者の張頤武によれば、2000年以降の文学、とくに「打工文学」の中には、社会への不満や不遇な境遇を描くと同時に、自分自身の能力で生活を改善し、より良い未来を開いていこうという「夢」が多く描かれており、それは従来、社会の底辺に位置付けられた人々を描き、彼ら彼女らの無力さを前提に、それにただ「同情」するだけだった従来の文学作品と大きく異なると指摘している。さらに張は文学的イシューの変化を手掛かりに、現代中国を「チャイナ・ドリーム」の時代と見なし、その主体的な生活改善への活力を高く評価している。王会員はこの個人の能力や主体性を重視する社会意識論の潮流を「出来る」論理として指摘し、さらに現代中国の社会意識を分析する言説が、この「正しさ」論理と「出来る」論理の狭間で揺れ動いていることを指摘した。

フロアからは、「正しさ」と「出来る」という用語を、社会学的な用語で説明することで、よりその含意が分かりやすくなること、また王会員の言う「出来る」論理の「出来る」とは、

社会的な成功／失敗を指すのか、それともそれを導く能力の高低を指すのかあいまいであること、「大きな物語」から「小さな物語」の変容とこの「正しさ」から「出来る」の変容との関連性について明確にしてほしい、等のコメントが寄せられた。

宮内会員による「中国社会のシステム分析【その壱】・・・第一世代のシステム分析（人体モデル）を用いて」では、人体モデルを用いて中国社会の基本構造を分析したものである。人体モデルとは、脳神経系・免疫系・内分泌系の三つよりなる「制御系」、骨格系・筋肉系よりなる「運動構造系」、消化器系・循環器系・呼吸器系・外皮系・泌尿器系からなる「維持系」、生殖器系からなる「種保存系」の四つの系からなり、報告ではそれぞれの系と中国社会の中のサブ・システムとの関連が述べられた。

具体的には、共産党主導の政治システムが制御系の中の脳神経系に、中国の歴史的思想が制御系の中の免疫系に当たり、中央政府や省、地方自治体、居民委員会などの政府・行政システムが構造系に、経済システムが維持系の中の消化器系に、国家財政システムが維持系の中の循環器系に当たること、また種保存系は民族政策などを含む法制度システムであり、制御系は各々ある種の自立性を持つ各系を統合し制御していることが指摘された。また毛沢東・鄧小平時代の社会統治システムを人治至上主義と見、さらにそれは漢から清まで、毛沢東時代から鄧小平時代まで貫いて存在していた「絶対統治者システム Dynasty Superior System」であること、しかし江沢民以降、引退後のリーダーの影響力の低下や集団指導体制が見られるが、これは封建制度の崩壊や革命の勃発、他の近代諸制度の変容と異なる、社会の構造とそのシステムの大変動が生じつつあることの兆候として見なしうるということが指摘された。

卯田会員による「村落の変化にかかわる共通性と相違性—中国・長江流域の村落を中心としながら—」では、Monda が村落の変化と健康転換の関係を調査するために用いた指標（「人口」「農業従事者の割合」「通信」等の10分野）を長江流域農村の実情に合わせて応用・改良した指標を用いて比較することで、改革開放後の長江流域の村落の変化とその4つのパターンを報告した。

第一に、改革開放後、2000年度以前に指数が急に上昇したタイプであり、特に90年代以降に急上昇した点に特徴がある。第二に、2000年度以降に指数が急に上昇したタイプであり、この急上昇の要因として、定住・移住政策と村の観光開発の存在が指摘された。第三に、改革開放後、指数が徐々に上昇するタイプがあるが、これは①都市近郊農村として発展し、指数が徐々に上昇しているタイプと、②指数が上昇する時期や速度は①に及ばないものの、指数が徐々に上昇していくタイプがある。第四に、指数に大きな変化が見られないタイプであるが、これらも①指数が全体的に低いタイプと、②ある分野の指数は上昇したものの、他の分野の指数が減少したために全体として指数の変化が見られなかったタイプが見られた。

これらの分析結果を通じて、長江流域の村落の共通性として、①指数の短期的な上昇には政府の政策が裏打ちしていること、②速度は異なるものの、ほぼすべての村落で指数が上昇していること、③指数に上がり止まりが見られること、が指摘された。

（文責：池本 淳一）

一般自由報告D

司会：中村 則弘（愛媛大学）

報告者：馮 偉強（愛知大学大学院）

巴 芳（同志社大学大学院）

Heung-wah WONG（香港大学）・

Hoi-yan YAU（ロンドン大学）

一般自由報告Dにおける報告は、以下の3つであった。

(1) 馮 偉強（愛知大学大学院）「日中間における国際出稼ぎ労働者の社会的ネットワーク——中国人研修生・技能実習生を事例として」

(2) 巴 芳（同志社大学大学院）「中国人社会におけるネットワーク研究の転換——伝統ネットワークから友人ネットワークへ」

(3) Heung-wah WONG（香港大学）・Hoi-yan YAU（ロンドン大学）“Kinship and Its Relevance to the Discourses on Sex and Sexual Behaviours in Taiwan: A Call for the Return of Kinship Studies”.

前二者は若手研究者の報告であり、そのいずれもが社会的ネットワークについて丹念な実証からの確な結論を導いた、手堅く、内容豊かな報告であった。ともに、これからの展開が楽しみなものでもあった。

馮報告は、中国人研修生・技能実習生への中国での渡日前日本語教育、および豊川市での渡日後のそれを通じた参与観察データに基づくものであった。これらに加え、研修生・実習生の送り出し機関、帰国後の状況のフォローまで行われていた。送り出し地と受け入れ地の双方について、社会的ネットワークと問題状況を参与観察から明らかにした貴重な研究であり、中国人研修生・技能実習生の視点に立った理論化、政策提言が期待される。

一方、巴報告は、在日中国人社会を含め、中国人社会の「社会的ネットワーク」において、個人を主体とした「緩やかな友人との繋がり」の形成が顕著となっており、そのなかでも「趣味ネットワーク」が重要な論点となることを的

確に指摘するものであった。なお、この報告では、中国における社会的ネットワーク研究、在日中国人社会研究の理論的整理のうえで、人民大学が全国規模で 2003 年から実施している CGSS 調査の解析結果を、在日中国人社会の実証研究に掛け合わせるという形で分析がなされた。

「緩やかな友人との繋がり」、「趣味ネットワーク」への変化を実証的に解明し、その重要性を指摘した意義は大きい。それを認めた上で、中国国内と在日中国人社会での社会的ネットワークの在り方の相違はどうか、これらがネットワークングの議論で想定された内容と同一視できるものかどうかなど、いろいろな内容が頭の中をめぐった。これはいうまでもなく、この報告がこれから大きな展開可能を秘めたものであった証左である。

さて最後に、Heung-wah WONG（香港大学）の報告である。これには、大きな衝撃を受けた。性・性行為と親族のかかわりから中国のコスモロジーを実証的に問いかける内容であった。われわれはともすれば、性・性行為にかかわる実証を、「際物」、「腫れ物」を扱うかのように、あえて回避してきたと思えてならない。だが考えてみれば、中国はもとより日本の歴史・慣習においても、性・性行為と家族・親族との関わり的重要性は自明といってよいはずである。さらにいえば、現代的な諸問題を考える上でも同様であろう。

本報告ではまず、性行為にかかわる 6 つのダイナミクスから成る分析枠組みが提示され、台湾、台北市における聞き取り調査結果から、そのなかの「Human」と「Animal」という区分と、女性の側のカテゴリー移行への着目がなされた。このカテゴリー移行を軸に、中国における性行為と「気」、「房」と家族の関係、そこで「鬼婚」がもつ意義についての考察が進められた。

これらを踏まえ、性と結婚をめぐる中国社会の論理が示されるとともに、中国人の親族関係が、地域、国家へと広がるコスモロジーにまで展開されていたことが明らかにされた。

この報告に対しては、「聞き取り内容は、枠組みは間違いないものか」、「フェミニズムとの関連で問題ではないか」など多彩な質問が投げかけられた。これらに対しては、「対象者が語った内容そのものに基づいただけであり、それをどう捉えるかということから『Human』と『Animal』への着目に至った」、「ジェンダー・モラルについては、あくまで『事実性』が大事だと考えている」との返答であった。これには Sex をめぐるディスコースが形にはまったものになりがちなことへ批判が込められていた。

ともあれ、陰と陽、天と地の関係をいうまでもなく、また中国古典を見るまでもなく、「性」が中国社会を貫く特性となっていることは間違いない。性行為から、それを実証的に解明した大胆さと社会学的想像力には敬服を禁じえない。いろいろな批判や議論は出ようが、本報告が圧巻の内容であったことは断言できる。

（文責：中村 則弘）

シンポジウム（2）

「現代中国の教育と移動」について

司 会：浅野 慎一（神戸大学）

報告者：植村 広美

（日本学術振興会・特別研究員）

アルタン・バートル（神戸大学）

奈倉 京子（京都文教大学）

会報では、シンポジウムでの議論を正確に、また臨場感をもってお知らせしなければならない。しかし大変申し訳ないことに、筆者はその責任を十分に果たせない。諸般の事情により、シンポジウムからすでに数カ月が経過した今、

不確かなメモとおぼろげな記憶を頼りに、この記事を執筆しているからである。まずは会員各位に心よりお詫びしたい。

さて、移動には地域間と階級・階層間のそれがあり、双方は密接に関連している。そして教育は、双方の移動の重要な経路とみなされている。教育を介した移動のチャンスが万人に平等に開かれているといったメリトクラシーの論理は、近代社会の建前として今も一定の影響力を保っている。

しかし一方、文化再生産論の指摘を待つまでもなく、実際のチャンスは決して万人に平等に開かれてはいない。しかもメリトクラシーは階層間・地域間の格差を不可欠の前提とし、その格差が隔絶的であればあるほど強力に機能する。

要するに、「取り込みながら排除する」近代的な支配様式は、教育という場で最も明瞭に現れる。教育は、一方でメリトクラシーやナショナリズムに人々を取り込んで統合を図り、他方で人々を徹底的に格差づけ、分断し、排除する。この双方の営みを通して、教育は近代社会の再生産に貢献する。

このような教育の支配機能は、あらゆる近代国家にみられる。しかし今、それが最も露骨に、しかも巨大なインパクトをもって立ち現れているフィールドの一つは、まちがいなく中国であろう。現代中国の教育と移動を再版近代化とみなすか、現代化（反近代＝ポスト・コロニアリズムの模索）と捉えるかは、議論の余地がある。しかし現代中国の移動と教育が、中国社会の、またグローバル・ナショナル・ローカルな諸領域が錯綜する世界社会の理解にとって極めて重要なテーマであることは、大方の認識が一致するところであろう。

本シンポジウムでは、①植村広美会員「農民工子女の教育機会に関する制度と実態」、②ア

ルトン・パートル会員「現代中国における少数民族教育の変容と教育格差」、③奈倉京子会員「中国人帰国留学生の文化的経験」の3報告を受け、討論を行なった。

それぞれの報告内容は要旨の記事に譲るが、3報告には明瞭な共通性があった。

一つは、いずれも本学会の若手会員による、膨大な時間と労力を傾注した緻密な質的調査に基づく刺激的な報告だったことである。いずれも本学会の若手の学的水準の高さと可能性を強烈に印象づける報告であった。植村会員の研究は、すでに『中国における「農民工子女」教育に関する制度と実態』（風間書房、2009年）として刊行されている。他の二人の報告の基礎となった調査研究も、書籍としての公刊が楽しみである。

いま一つの共通性は、3報告とも現代中国のいわゆる「正常人口の正常生活」（鈴木栄太郎）ではなく、マージナルな人々に焦点を当てたことである。「移動」をテーマにする以上、それは当然かもしれない。しかし、農民工や少数民族、そして中国のアカデミズムの中で帰国留学生が遭遇する諸問題も含め、何らかの周辺性を刻印された人々のまなざしや語りは一質的調査という3報告に共通する研究方法とも相俟って、本シンポジウムに独特の「コード（chord & code）」を与えた。

さて、コメンテーターの滝田豪会員・松木孝文会員からは、①3報告が浮き彫りにしたマージナルな人々の諸現実が、都市戸籍住民・漢族・国内アカデミズム等、いわゆるマジョリティの中でいかに受けとめられ、対処されているのか、②農民工・モンゴル族・帰国留学生等、各主体を固有の単位とするアイデンティティやコミュニティ・共同の構築は可能かつ有意義か、③市民社会の成熟、国民統合、格差の緩和等は進展しているのかといった趣旨の質問

が、3 報告のそれぞれに深く踏み込んだ形でなされた。

これに対し、報告者からは、①同化と異化、統合と排除が単純な二者択一ではなく、一種の「入れ子構造」として現れており、各主体を固有の単位とするアイデンティティや共同の構築は困難である、②ただしそれは単なる多元化ではなく、グローバル化・市場化の下で明瞭な中核・周辺構造をもち、したがって国民統合の意志、市民社会の成熟（農工工学校支援の NGO、帰国留学生のトランスナショナリズム、都市に居住して漢語を常用する少数民族の増加等）が存在しても、現実の格差は到底埋め難く、むしろ拡大している、③何らかの主体性が看取しうるとすれば、それは「新たな文化を農村に持ち帰って都市と農村をつなぐ農民工」、「『生活』に根差して新たな多様な民族性を創出するモンゴル族」、そして「道を切り拓こうとする帰国留学生の個人としての主体性」、すなわち国民統合や市民社会の成熟、民族自決や階級的連帯といった近代的価値に回収されにくい人間の普遍的な潜在能力の発揮ではないかといった解答が、これまた各報告の分析を深くふまえた形でなされた。

その他、フロアから、①奈倉報告をめぐり、アカデミズムにおける細分化された専門性の質（文系・理系等）、同窓会、研究業績等がもつ意味、②アルタン・バートル報告をめぐり、家族構成や生業と教育戦略の関連、③植田報告をめぐり、教育による階層移動が客観的には極めて限られた道であるにもかかわらず、教育が「消費」ではなく「投資」とみなされる契機等について、いずれも興味深い議論が交わされた。これらの多岐にわたる論点は、「移動と教育」というテーマが、底知れぬ深みと広がりをもつことを示唆していた。

最後に、本シンポジウムで議論されたことは、

もちろんいずれも直接には現代中国を素材としたものだが、本質的・理論的にはあらゆる近代社会に通底する論点であったようにも思われる。それは、極めて有意義ではある。しかしこうした認知枠を根底から組み替える潜在力としての「チャイニーズネス」が存在するかどうかは、十分に議論されなかった。一重に司会者である筆者の力量不足である。ただ、本大会のもう一つのシンポジウムのテーマがまさに「グローバリゼーションとチャイニーズネス」であった。今後、この2つのシンポジウムの成果を架橋させることにより、新たな日中社会学の手がかりが見えるのかも知れない。そんな予感を抱かせてくれた大会だった。

（文責：浅野 慎一）

■第 31 回総会報告

前事務局（首藤明和）

開催日：2010 年 6 月 5 日（土）

場 所：一橋大学

中村則弘会長からの開会の挨拶に続き、文楚雄会員が議長に選出され、議事に入りました。

第 1 号議案 2009 年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催 2009.6.6～7（名古屋大学）
2. 機関誌『日中社会学研究』第 17 号編集発行（300 部）2009.10、第 18 号編集
3. 『21 世紀東アジア社会学』第 2 号の編集発行（300 部）2009.6、第 3 号編集
4. 「ニューズレター」発行 3 回 48 号～50 号 2010.1、2010.4、2010.5
5. 理事会開 2 回、2009.6.6 2010.6.5

6. ホームページの運営	ワーキングペーパー集	150,000	320,250	▲170,250
7. 会員概況 入会 24名, 退会 0名 (2009年6月から現在に至る) 現会員 232名 (一般 117, 学生 115)	制作費			
8. 機関誌編集委員会報告	学会ニュース経費	20,000	0	20,000
9. 研究委員会報告 秋の研究集会 2009.10.30 (愛媛大学)、冬の研究集会 2009.12.5 (東京農工大学)	事業費	5,000	0	5,000
10. 海外でのシンポジウムの開催 2009.09.12 (中国・首都経済貿易大学)	事務費	70,000	29,460	40,540
	通信費	100,000	75,160	24,840
	会議費	50,000	0	50,000
	大会補助	70,000	70,000	0
	予備費	389,081	0	389,081
	合計	1,354,081	994,870	359,211

第2号議案 2009年度決算報告

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、

I. 一般会計報告、II. 第21回大会・第30回総会特別会計について、報告がなされました (備考については略してあります)。

I. 一般会計報告

収入総額	1,397,205
支出総額	994,870
差し引き残額 (次年度繰越金)	402,335
※残額内訳	
郵便局定期預金	300,000
郵便振替口座	280
郵便局普通口座	52,878
現金	49,177

収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金	628,081	628,081	0
会費収入	700,000	757,000	57,000
機関誌販売	25,000	12,000	▲13,000
雑収入	1,000	124	▲876
合計	1,354,081	1,397,205	43,124

支出の部

費目	予算額	決算額	残額
機関誌制作費	500,000	500,000	0

II. 第21回大会・第30回総会特別会計

日時：2009年6月6日・7日

会場：名古屋大学

大会会計担当者：西原和久・黒田由彦

収入総額 281,000

支出総額 281,000

残額 0

収入の部

大会参加費	89,000
懇親会費	111,000
弁当代	11,000
大会補助	70,000
計	281,000

支出の部

運営費・事務費・茶菓	16,413
弁当代	11,000
懇親会費	111,000
招聘講師交通費	50,950
大会看板	23,900
謝金 (手伝い学生)	52,500
合計	281,000

上記の通り報告申し上げます

2010年5月13日

日中社会学会事務局

会計担当理事 唐 燕霞 印

江口伸吾 印

- ・小中高大連携
- ・各エリアでの研究会の開催等
- ・海外でのシンポジウムの開催
- ・海外研究者ネットワーク構築
- ・社会学系コンソーシアムへの参加

第3号議案 2009年度会計監査報告

監査より、以下の資料について監査結果について報告がなされました。

決算報告および会計監査報告を受け、2009年度決算が賛成多数で承認されました。

2009年度監査報告

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2010年5月25日

監査 鍾 家新 印

富田 和広 印

第4号議案 2010年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会開催：関西学院大学開催
2. 機関誌『日中社会学研究』
第18号編集発行、第19号編集
3. 『21世紀東アジア社会学』
第3号編集発行、第4号編集
4. 「ニューズレター」発行 3回
5. 研究会開催 2～3回
6. 理事会開催 2～3回
7. ホームページの運営
コンテンツ充実
8. 学会銀行口座の開設
9. 中長期構想の策定
研究活動の一層の充実に向けて

第5号議案 2010年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

収入の部

	予算額
前年度繰越金	402,335
会員会費	750,000
機関誌販売	25,000
雑収入	1,000
合計	1,178,335

支出の部

	予算額
機関誌制作費	500,000
『21世紀東アジア社会学』制作費	150,000
学会ニュース経費	20,000
社会学系コンソーシアム年会費	10,000
事業費	5,000
事務費	70,000
通信費	100,000
会議費	50,000
大会補助	50,000
予備費	223,335
合計	1,178,335

第6号議案 理事、監査、会長の承認

日中社会学会会則および日中社会学会役員選出規程にもとづいて、(1)理事、(2)監査、(3)会長の順に審議がなされました。

(1) 理事の承認について

原案として以下の10名が示され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規程第2条)。

(敬称略)

北海道	0名	
東北	0名	
関東	6名	石井健一 長田洋司 根橋正一 南 裕子 李 妍焱 若林敬子
中部	2名	王 文亮 西原和久
関西	2名	浅野慎一 陳 立行
中四国	0名	
九州沖縄	0名	以上

(2) 監査の承認について

原案として以下2名が示され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規程第4条)。

(敬称略)

鍾 家新、首藤明和

(3) 会長の承認について

総会を休会としている間に、(1)で承認を受けた新理事会が開催されました。その結果、陳立行理事を会長に推挙する旨が、再開後の総会に報告され、賛成多数で承認されました(会則第8条、選出規程第3条)。

第7号議案 次年度大会・総会の開催地・開催校について

理事会原案として関西学院大学が示され、賛成多数で承認されました。

■2010年度第2回

日中社会学会理事会報告

I. 日時：2010年6月6日12:30-13:25

II. 場所：一橋大学

III. 出席者：(順不同、敬称略)

陳立行、浅野慎一、石井健一、西原和久、李妍焱、南裕子

審議事項3より池本淳一、鈴木未来

(陪席)中村則弘前会長、首藤明和前庶務担当理事

IV. 審議事項

1. 理事の辞退に伴う繰り上げ当選について
若林敬子会員から辞退の申し入れが陳会長にあり、理事会として承認。これにともない、次点の江口伸吾会員が繰り上げ当選で理事に。

2. 推薦理事の選出について

(1) 陳会長から以下の会員の提案があり、承認された。

袖井孝子会員、池本淳一会員、鈴木未来会員、王向華会員

(2) 江口会員も候補であったが、理事選挙で繰り上げ当選となったため、推薦理事が1名不足している。地域等を考慮して今後決定することとした。

3. 学会運営について

(1) 前理事会へのマニュアル作成の依頼。
6月末を目途に引き継ぎを行えるように、前理事への連絡を前事務局の首藤会員にお願いした。

(2) ネット理事会の規約作り。

内規にすべきとの意見も出され、会則の関連規定も参照しながら、継続して検討することとした。

(3) 学会業務の担当者グループの連絡をメールで行う場合は、会長、事務局にも同送し、情報の共有をはかることとする。

4. 研究活動について

(1) 学会投稿論文について

投稿論文のレベルの向上、学会研究会活動の活性化を図る観点から、投稿論文は、学会大会、研究会（秋、非定期）での発表を経ることが望ましいとする（条件とはしない）。

(2) ニュースレターのデジタル化

経費節約のための措置として検討。個人情報の取り扱いの問題は、パスワードを設定することで対応可。次号は紙媒体で発行し、その次からデジタル化する。閲覧できない等で引き続き紙媒体を希望する会員には郵送を続ける（次号送付の際に、葉書で意向を確認）。

(3) 研究会等について

会長より、①香港会員と在中国の会員の研究会開催（不定期）、②海外シンポジウムの開催、③小中高大連携、について提案があり、承認された。

3. 学会の横の連携について

(1) 確認事項

社会学系コンソーシアムへの参加を引き続き行い、学会HPの英語発信に取り組む。

(2) 中日社会学会との連携

組織として連携は難しい状況である。帰国した会員の個々のネットワークで連携を進めることが現実である。可能な限り、帰国した会員との共同研究および共同シンポの開催に努める。

4. 若手会員の就職支援について

中国の大学や研究機関の募集情報について、会員から情報を寄せてもらい、ニュースレターやメルマガで告知する。

日本国内については専門の情報提供サイトがあるので本学会として情報提供は特に行わない。

5. 理事の分担

HP：石井健一

会計・名簿：江口伸吾

学会誌編集：袖井孝子、李妍焱、王文亮、鈴木未来

ワーキングペーパー：陳立行、長田洋司

大会：根橋正一、浅野慎一

研究プロジェクト：西原和久、王向華

ニュースレター：池本淳一

庶務：南裕子

発送は今年度から外注。

6. その他

(1) 海外会員の会費納入の便をはかるため、学会の銀行口座開設を行う。

(2) 3年以上の会費滞納者には、ニュースレター、学会誌、ワーキングペーパーを送付しないことを確認。

(3) 予算節減のため、『21世紀アジア社会学研究』第4号以降については、ネットジャーナルとする方向で検討する。

■『日中社会学研究』第19号

原稿募集のお知らせ

袖井孝子（編集委員長）

日中社会学研究第19号の投稿申し込みを受け付けます。

締切は2010年12月10日（金）17時まで。

下記の駒澤大学の李妍焱先生宛にメールでご連絡ください。

宛先：yanyan@komazawa-u.ac.jp

なお、原稿の締切は2011年2月28日(月)です。また、書評に取り上げてほしい本がありましたら、自薦、他薦を問わず、著者名、書名、出版社、出版年を2月28日までに李先生にお知らせください。

■会員エッセイ

「北京滞在記」

伊藤麻沙子(大阪大学・蘭州理工大学)

みなさん、こんにちは。現在、蘭州に滞在中の伊藤です。私はこの夏、7月半ばから約1か月半、北京に滞在しました。今回は私の初北京滞在記を報告したいと思います。

1. 天気

7月13日、夏はとても過ごしやすい気候といわれている蘭州から、逆に過ごしにくいといわれている北京へ向かいました。ところが、北京に着いてみると、噂に聞いていたほど暑いわけでもなく、むしろ雨の日が比較的多くて、肌寒いくらいの気候でした。今年の北京の夏は、例年に比べて過ごしやすかったのではないかと思います。ただし、“潮湿”の方は噂どおりでした。この“潮湿”のせいで、毎日、安宿に帰って一番初めにやることは洗濯でした。宿には洗濯機がなかったので、手洗いをしていました。私の北京生活は、まさに大学生時分の“バックパッカー時代”の再来という感じで、懐かしいやら悲しいやらで、少し複雑な気分でした。

2. バス

北京滞在の目的は語学習得でした。私が通った大学は海淀区にあります。大学から西単までバス1本で行くことができるので、生活の方はなかなか便利でした。みなさんも知っているか

と思いますが、中国では長距離バスを除く、平時のバスに時刻表がありません。もともと気長な私は、休みの日に買い物に出かけるときなどは、何時にバスが来てもかまわないです。しかし、さすがの私もバスで通学しようと思ったら、話は別でした。いつ来るのか分からないバスを待っていても埒があかないので、滞在開始2週間は片道約30分、徒歩で通っていました。この2週間は、とぼとぼ歩いている私の横を、颯爽とバスが通り過ぎてゆくという毎日で、とぼとぼ状態でした。その後、おおよそのバスの時間が分かるようになったので、すぐバス通に切り替えました。少し意外だったのは運賃です。北京市郊外など、よほど遠くへ行かない限りは、どこでも1元で行くことができます。“北京五輪”や“国際都市・北京!”というイメージが強かった私は、収入や物価の高さに比例して、運賃も相当高いのではないかと予想していたので、思いのほか安くて、やや驚きました。

3. 早朝の生活

授業前の徒歩通は多少疲れましたが、現地の早朝生活の1コマが垣間見られて、けっこう楽しかったです。歩いている私を追い越していくのは、バスだけではありません。大量の西瓜を積んだりアカーを引く馬もまた、毎日、私を横目に通り過ぎて行きました。その馬はある“胡同”の入口に着くと、ようやくご主人から餌をもらうことができるようで、むしゃむしゃと美味しそうに食べていました。馬が餌を食べ始めると、今度はその主人の出番です。買い物かばんをぶら下げてやって来るおばさんたちに、片っ端から声をかけて、西瓜を売っていました。というよりもむしろ、“売りつけていた”という方がより正確な表現かもしれません。この西瓜売りの他にも、野菜売り、くるみ売り、かばん売りなどが続々と集まって来て、あっという間に、そこは“朝市”のようになっていました。

残念なことに、私は听不懂なので、そこでどんな“やりとり”あるいは“かけ引き”が繰り返されているのかは分かりませんでした。

おそらくこのような朝の光景は、北京のあちらこちらで見られると思います。私は以前、友だちと一緒に、福岡で八百屋を調べ回ったことがありました。巨大な青果市場、大きなスーパー、農家が毎朝運んできて売る小さな店舗の八百屋が同時に存在していて、それらのいずれもが現地の人びとの毎日の食卓を支えている状況を参与観察しました。そのとき、かつての商人の街・博多から連綿と続く“伝統的慣習”とも呼べるような販売形態と、快適な現代生活を可能にする“利便性”とが、ごちゃまぜになって1つの（地方）都市を形成している点に興味を持ちました。北京は都市規模だけをみれば、福岡よりもずっと大きな街です。けれども、私が目にした早朝の風景を考慮に入れると、福岡に近いあたりで都市が形成されているのではないかと感じました。

4. ホカ弁・出前

安宿にはもちろん“餐厅”などはありません。毎朝コーヒーを1~2杯飲んで、宿を出ました。授業は昼には終わるので、1日の“初飯”は昼食でした。“なじみの店”をつくりたかったので、毎日同じ店に通いました。その店のメインは東北料理です。この店を選んだのは東北料理が食べたかったからではなく、店の名前が“好人缘饭庄”だったので、対応が優しいのかもしれないと思ったからです。幸運なことに、実際に対応が親切で、“老板”も“服务员”も本当に優しかったです。

私は何となく店内では食事する気がせず、毎回“盖饭”の“打包”でした。蘭州ではいつも“打包”ではなく“带走”と言っていたので、一番初めに行ったとき“带走”を使いました。ところが、即答で「ああ？」と言われてしまい、

私の方も「え？」という感じでした（私の発音と声調が下手くそだったせいもありますが）。その他に知っている単語は“打包”と“盒饭”だけなので、この2つを立て続けに連呼しました。その結果、どうやら“打包”が通用したようです。

“打包”と“带走”の違いはまだよく分かりませんが、これらは両方とも、日本でいうところの“ホカ弁”や“出前”に相当すると思います。特に“盖饭”の“打包”はそうです。お昼時になると、どこからともなく人がわいてきて、店中が“打包”待ちでいっぱいになります。さらに、店の電話もひっきりなしに鳴り響いて、“老板”が各種“盖饭”の注文を受けていました。出来上がると、“自転車隊”のような若い男性たちがそれらを抱えて、配達に出かけていました。

北京でも蘭州でも、まだ日本のような形態の弁当屋は見かけませんが、同様の販売方法があることは分かりました。北京のような大都市で、どうして“盖饭”の“打包”に特化した専門の弁当屋がないのかという点について、これからもっと注意して観察しながら、調べてみたいと思いました。まとまりのない単なる雑感ですが、以上が私の北京滞在記です。

■事務局からのお知らせ

□メールマガジン、届いていますか？

昨年度から、メールマガジンによる広報が行われています。事務局へご登録いただいたメールアドレスへは、「日中社会学会メールマガジン」が不定期に配信されます。登録がまだの会員の方は、事務局までご連絡ください。また、メールアドレスに変更があった方もご連絡をお願いいたします。

□会費納入のお願い

会費請求書と振込用紙を同封いたしました。
会費の納入をよろしくお願いたします。

会則では、3年間会費を納入しなかった場合は、会員の資格を失うこととなります。また、『日中社会学研究』への投稿の際には、投稿する当該年度までの会費納入が条件となります。会費未納の方はご注意ください。

□次号以降のニューズレター送付方法 についてのお知らせ

次号以降のニューズレター送付方法について、重要なお知らせを同封いたしました。ご覧いただき、またお手元で保存していただきますようお願いいたします。

■冬季研究集会のお知らせ

下記日程にて、2010年度冬季研究集会を開催いたします。みなさまのご参加、お待ちしております。

報告者：張玉林（南京大学教授）

題目：現代中国における「賤農主義」の形成

司会：西原和久（名古屋大学教授）

日時：2010年12月18日（土）

15:00～18:00

会場：名古屋大学情報文化学部

北棟3階：社会学演習室（C344室）

※地下鉄名城線「名古屋大学駅」下車、1番出口から出て徒歩5分

：一番出口横の学内地図を参照ください。中央図書館のとなりです。

（*コメンテーターは、決定次第、HPに掲載いたします。）

日中社会学会ニューズレター No.60

編集：池本 淳一

（早稲田大学）

発行：日中社会学会事務局

〒186-8601 東京都国立市中2-1
一橋大学・南裕子研究室

info@japan-china-sociology.org

yminami@econ.hit-u.ac.jp

tel: 042-580-8810（研究室直通）

fax: 042-580-8799（共同研究室のため南宛を明記してください）

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2010年11月